

共空間内〈場〉の生成過程における身体性の 性格と機能についての理論的考察

A Theoretical Study of Characteristics and Functions of Corporality in the Emergence of *Ba* in Shared Space

河野 秀樹
Hideki KONO

Abstract

In major studies of *ba* as the emergence of a co-created context shared by individuals in interactive settings, the importance of the presence of human “body” has commonly been pointed out. In fact, “corporality” is regarded as an indispensable agent in tacit communication among individuals within *ba*. However, an attempt to clarify the functions of corporality in *ba* and to integrate related discussions concerning its synthesizing effect has not been made. This heuristic theoretical study discusses the essential qualities of corporality in *ba* and its functions in the emergence of *ba* through reviewing literature about *ba* and the function of corporality in the intersubjective phase of human communication. Specifically, I will discuss this theme through comparing the concept of corporality from Shimizu’s theory of *ba* with equivalent concepts from studies in phenomenology and ecological epistemology.

Key Words : *ba*, corporality, epistemology, intersubjectivity, nonverbal communication

キーワード：場、身体性、認識論、間主観性、非言語コミュニケーション

0. はじめに

人間を含む種々の生命体が協働的に作り出す共有された意味空間としての〈場〉は、これまで哲学、生命科学、心理学、経営学など様々な視座からその本質と性格が議論されている。そうした研究の中で、〈場〉の内に存する個々の要素により共有された空間においてそれら結び全体性としてのまとまりを生み出すメカニズムが語られるとき、共通して言及されるのが、情報伝達のチャンネル及び主体としての「身体」の存在の重要性である。例えば、生命科学者の立場から〈場〉の理論を説く清水〈2000〉は、〈場〉の生成原理には暗在的な情報授受の媒体

としての身体のはたらきが深く関わっていると。清水によれば、〈場〉が成立するのは、個々の生体に存する局在的存在形態と個体を超えて共有される遍在的存在形態という生命存在の二重性があるからであり、両者は相互に円環的に作用し合うことで環境と自己との関係についての意味上の整合性を高めていく。このうち、遍在的形態（人間の場合には自他非分離的自己としての遍在的自己）のはたらきを取り結ぶのが「身体」であるとした上で、清水は次のように述べる。

身体とその身体が存在している場所との間には、直接的なインタラクションがある。そしてそのインタラクションを通じて場所の状態が身体の状態に直接的に反映する。そして自己はその身体の状態を場所の状態として感じとる。遍在的な存在形態にある生命のはたらきを通じて、身体には場所の全体的な状態が反映するのである。(p.97)

清水は〈場〉をこのように「身体の内部に映される場所の状態」(p.97)として捉え、映し出される場所にはその不可分な一部として自己自身が入っていることが前提であるため、そこには自己の「身体」が存在していることが必要であるとする。

さらに、〈場〉に包摂される個々の生体間の情報交換⁽¹⁾も身体性に立ったコミュニケーションによってなされることが清水(2000)、三宅(2000)、露木(2003)、野中・紺野(2000)、河合(1976)など主要な〈場〉の論者により指摘されている。

このような〈場〉における言語化されない情報の伝達と共有は、Polanyi(1966)のいう「暗黙知」として「身体」のはたらきを通じて行われるとされるが、こうした情報伝達を取り持つエージェントとしての身体性の重要性が広く認知される一方、その本質については、主要な〈場〉の理論においても、我々の認識のあり方と関連づけた詳細な説明はなされていない。〈場〉におけるこの暗在的な認知プロセスを支える、「身体性」の本質とはなにか。本稿では、〈場〉の生成に必要な情報の伝達と共有に当たって身体性が意味的にどのような位置づけをもち、具体的にどのようなはたらきを担うのかを、現象学、生態学的認識論などからの知見を引きながら考察する。

議論の前提として確認しておきたいのが、〈場〉という概念が日本人にとっては実生活に根ざした、個人と環境とを結ぶ現実的な感覚として認知されている一方、研究の対象としての〈場〉は、それぞれのアプローチに応じて異なった文脈の中で論じられてきた(河野, 2010)ため、未だ〈場〉および〈場〉に類する概念に関し、それらが扱われる全ての領域間を横断的に結ぶ統一した理論は存在しないという点である。本小論は、これを踏まえ、主要な理論で扱われる〈場〉の概念を身体論の視座から捉えなおすことにより、〈場〉における身体性の問題を論じるための理論的文脈を構築することを趣旨とするものであり、既存の理論的枠組みに基づいて〈場〉の作用を実証的に検証することを目的とするものではない。

1. 〈場〉の定義

〈場〉における身体性の意味を論ずるに先立って、本稿における〈場〉の定義をしておく必要がある。人間の作り出す〈場〉については、関連分野の研究者達がそれぞれの見地から定義付けを行っているが、ここではKono（2007）のものを参考に以下のように定義する。

〈場〉とは、特定の空間的及び時間的領域内にある個人の集団により、暗在的なチャンネルを通じて共通に認識され意味づけられた関係性の枠組みである。その際、〈場〉が機能するための基体としての〈場所〉が存在することを前提とするが、〈場所〉とは成員の活動のための物理空間だけでなく、社会的、文化的環境を含む、その〈場〉固有の状況的要因の総体である。〈場〉は個々の成員に〈場所〉の持つ意味を伝えるとともに、成員が相互の関係を自己組織し、彼らの作り出す共同体において共通の文脈（コンテクスト）を共創するための原理として機能する。

河野（2010）では、〈場〉の主要理論にはほぼ共通して述べられる〈場〉の性質として、その作用が個を包摂する全体として〈場〉の中の構成要素をまとめ、全体としてある方向性を生み出すものであることが述べられている。特に清水博を中心とする生命科学的なアプローチでは、〈場〉とは、生命要素の集団が、共有する〈場所〉の意味を創出するうえで全体との関係に立って自らの振る舞いを決定していくためにはたらく媒体である、と説明される。清水（1996）によれば、〈場〉の中の個々の生命要素間には自律的な関係の生成がみられ、そうした関係性のネットワークの中で、個々の構成要素は自己と全体との関係の認識にもとづいて自己の役割を定義し、行動として具象化してゆく。個々の要素（アクター）のこうしたアクションは互いのアクションとの整合を図りながら全体としての方向付けを更に精緻かつタイムリーなものにし、協働的なコンテクストの創造という形で〈場所〉の意味づけを新たなものにしていく。こうして、〈場所〉全体と個々の生命要素は互いに意味づけ、意味づけられるという循環的な作用のなかに置かれることになるが、清水によれば我々人間の場合、個々が〈場所〉の状態を認識するのは、言語などの記号的情報ではなく、暗在的なチャンネルを通じて知覚される非記号的な情報による。〈場〉におけるこうした情報は知性よりむしろ身体性のレベルで知覚⁽²⁾され、共有されると考えられるが、この「身体性」のはたらきの意味を明らかにするのが本稿の目的である。

2. 〈場〉における身体性へのアプローチの方法

〈場〉の生成過程における身体性のはたらきを理論的に考察する上で、本稿では主に現象学および生態学的認識論の知見を議論の拠り所として引用する。ここで問題となる「身体」とは、現象としての身体、即ち、Merleau-Ponty（1945）のいう、「生きられる世界」に臨む、我々の生活世界の中で実際にはたらいっている生きられた身体であり、自然科学が扱う「対象身体」では捨象される様々な意味を含んだ経験の主体としての身体（市川、1992）であること、そうし

た経験に内在する世界の認識のメカニズムを論じるには、先反省的なものを含めた認識過程と知覚内容の連関を照射する現象学が有効な視座を与えてくれると考えられることがその主な理由である。山口（2004）が指摘するように、自然科学が成立する基盤としての生活世界で非言語的に生きられている感性的意味連関に焦点を当て、その構成を原理的に明らかに分析する点において、また、知覚の基底にはたらく受動的総合などの諸原理に内在する規則性を考察の対象とすることによって、フッサール（Husserl, E.）の言う、「われわれの身体と環境世界の間にはたらいっている統覚の層」（p.160）の様態を詳らかにする試みに徹する点で、現象学的方法が単に主観主義に基づくものではないことは明らかである。

また、河野（2005）が指摘するように、我々にとっての「環境」の意味から世界と我々との関係を考える生態心理学が拠り所とする生態学的認識論の視点を取り入れることで、表象主義的独我論に基づく個体主義的な主体の理解を離れ、我々と環境との相互作用の中にある主体を成り立たせているものとしての身体理解に迫ることが可能であると思われる。

具体的には、本小論では〈場〉と身体性の関係についての基本概念を提示するために、最も体系的に〈場〉の生成メカニズムを論じたものとして清水博の〈場〉の理論を採用したうえで、我々と環境、および他者との関係における身体の意味とはたらきに関しては、議論の基本的文脈を敷く上で市川浩の身体論を援用し、関連する現象学的考察を引きながら〈場〉の理論との関連を論じる。また、〈場〉の生成プロセスにおける身体のはたらきが、我々と環境および他者との関係にどのように関わるかについて、現代の生態心理学者らの知見を論考の主な拠り所とする。

3. 清水博の〈場〉理論

3-1 〈場〉の生成メカニズムと身体

清水（1999）は生命科学の視点から、生命体が生み出す〈場〉の情報とは何かを説明しようと試みている。清水によれば、生命の本質とは、生命システムを構成する生命要素のあいだにコヒーレントな関係を作る操作情報を自己生成し、そのはたらきによって各要素のはたらきを統合してシステム全体としての意味を持つメッセージや機能を作っていく能力である。ところで、こうした自律的な秩序の生成は、それぞれの要素のはたらきの総和としては説明できないものであり、要素とシステム全体とが相互依存的な関係にあることが、そうした秩序形成の前提となる。ただし、この全体のはたらきの方向性が決定されるにはシステムの境界やコンテクストに相当する拘束条件が必要となる。清水によれば、全体的なトップダウンの作用がもたらすこうした拘束の〈場〉が、生命システムの中ではたらく〈場〉である。互いの関係によってそのはたらきや性格を変える生命要素を清水は「関係子」と呼ぶが、〈場〉は関係子に己のいる〈場所〉にあった自己の振る舞いを決定させるための操作情報の生成に関する指針をもたらし、多様な関係子が「全体と依存しあってはたらくための媒体となる」（p.254）のである。

このように、〈場〉は〈場所〉の中で関係子により自己組織され、関係子のはたらきをまとめ

るための拘束条件としてはたらくが、個々の関係子の内部に映し出された〈場所〉の状態がこの拘束条件としての〈場〉の情報に他ならない。この「内部場所」としての〈場〉の情報にもとづいて、個々の関係子は全体に対する自己の位置付けを知り、〈場所〉の状況に合った振る舞いをする事で全体の意味の創出に寄与していく。個々の人間としての我々も生命要素として関係子の性質を持っているが、人間が生み出す〈場〉の情報の伝達に直接関与している媒体が「身体」である。清水（2000）は、身体のはたらきを、物理的身体のはたらきに加え、感情、情動といった心的なはたらきを含むものとしたうえで、身体と〈場所〉の間には直接的なインタラクションがあり、身体には〈場所〉の全体的な状態が反映しているとする。この意味で、人間にとっての〈場〉とは「身体の内面に映し出される場所の状態」（p.97）であり、こうした〈場〉の生成は自我的意志の関与なしに自己組織的に行われる。清水は、我々にとって〈場〉とは、具体的には〈場所〉の状況を映す印象、雰囲気といった形で意識にのぼることが多いが、こうした半ば生理的とも言うべき情動的反応こそが「身体性」に基づいたものであるとする。

3-2 自己の二領域性と身体性

上に述べたように、清水は〈場〉の情報が身体性を通じて個人の中に映し出され、〈場所〉のイメージとして自覚されるとし、〈場〉の生成と共有は意志の関与なしに自然発生的になされると結論するが、彼は同時に、拘束条件としての〈場〉を自律的に生成する自己を「主体的自己」（清水、1999、p.128）と呼ぶ。即ち、ここでいう主体的自己とは、生命要素の集まりとしての生命システム内にはたらく拘束条件を共働的に創出する能動性を持ち、〈場所〉の中の生命要素間に自己組織される秩序を自己の表現と観じうる自己である。ここに、自我的意志の関与しない主体的自己という逆説的な概念が提起されることになるが、清水はこれを自己の二重領域のうち「遍在的自己」のはたらきに依拠するものとして説明する。清水（2000）によれば、我々の自己は二領域的構造を持ち、一方の領域に個としての行動の主体である自己の局在的存在形態である「自己中心的自己」が、他方の領域に〈場所〉全体に拡がり〈場所〉と非分離的關係にある遍在的存在形態である「場所的自己」のはたらきが現れる。これら二領域の自己のはたらきが相互に整合性を持つよう誘導し合うのだが、両者の状態が合致したときその界面に生成するのが、〈場所〉における自己の自覚としての「意識」である。即ち、我々が〈場所〉全体に対する自己の位置である「いま、ここ」を自覚できるのは、場所的自己が局在的自己のはたらきを補うからである。この、遍在的自己である場所的自己は、〈場所〉と非分離的な関係にあるのみならず、主客の境界を越えた自他非分離的な存在であり、他者の遍在的自己と繋がって「自他非分離的自己」を形成する。⁽³⁾ 自己の場所的領域であるこの個人の場所的自己（遍在的自己）のうちに生成する〈場所〉のイメージが〈場〉の意味的情報である⁽⁴⁾が、場所的自己の扱うこの情報は非言語的な暗黙知であり、しばしば情動的、直観的性質を伴った「対象化できない情報」（清水、1996、p.69）である。従ってその伝達を媒介するのは記号化されない、「身体」のはたらきである。清水は〈場〉の情報と身体関係を次のように描写する。

個人は遍在的自己の内部に場所を映すことによって場所モデル（場所のイメージ）という「ソフトウェア」を生成する。場は場所的領域に生成する場所の全体的表現である。この場所モデルの創出は 自己の意志に関係なくその身体の自律的なはたらきによって場所的領域に場所が「映される」ことによっておきるものである。（清水, 2000, p.121）（ ）内挿入は稿者

こうして、場所的自己と連動する「身体」は自我の関与なく〈場〉の生成プロセスにおいて主体となり、能動性を持つ。

清水（1999）は、〈場〉の生成を基礎づける行動原理は因果律的に予測を立てて行動に移すのではなく、行動から認識へという逆のパターンをとるとする。清水によれば、これが、様々な要因が変化し合いながら絡み合う実際の世界における生命体の必然的な有り様である。具体的には、我々は無限の可能性の中から共働的に一つの行為を創出するために、個々の「直感的な行為」から始める。我々は絶えず変化する複雑な状況に共働的に対応するにあたり、直感的な行為により、「まず場所を、自己の身体を媒介として内部場所に映す」（p.174）。こうして〈場所〉を映し出す「身体」自身も〈場所〉の状態に合わせて変化する。この身体の変化に合わせてかたちで意識の状態も変化する。こうして「意識が身体によって拘束される」（p.174）ことにより拘束条件が生成されるというのである。この拘束条件こそが〈場〉に他ならないが、我々が共働的に作り出す〈場〉は状況の変化に応じて生成と消滅を繰り返しながら、我々と〈場所〉、即ち状況との関わりを「ドラマの筋のように拘束していく」（p.174）のである。

以上が、清水の説く〈場〉の生成理論における身体性の位置づけの概略である。以下に、〈場〉の生成プロセスにおける身体性の具体的な意味とはたらきを、清水の理論と関連づけて論じる。

4. 身体性の意味と心身二元論からの脱却

〈場〉理論における「身体」とは、清水（2000）が指摘したように、物理的身体だけでなく知覚を支える感覚のはたらき、さらには情動、感情といった心的はたらきを含めた身体の機能そのものも意味している。そうした広い意味での「身体」は、上述の通り、〈場〉の情報を伝え、個々の生命要素をとりまとめる拘束条件としての〈場〉を生み出す「主体」となる。このような身体理解には、いわゆる「精神」と「身体」とを区別し、「身体性」を観察可能な物理的、化学的反応に還元する身体観を脱却する必要がある。以下に、現代における身体論の位置づけを確認するために、これまでの身体論の大まかな流れと心身二元論を離れた身体性の理解の出現までの経過をまとめる。

市川（1992）によれば、デカルトに代表される心身二元論は、精神の聖化と身体の疎外というユダヤキリスト教的な宗教倫理に基づく価値観を基底として生み出されるが、こうした「もの」としての身体は、身体を客観的な対象として研究する自然科学の機械論的自然観にとりこまれていく。対照的に、哲学は世界を精神のはたらきのうちにのみ捉えようとする主観主義に

傾き、「身体」の位置づけは相対的に辺縁に寄せられることとなる。⁽⁵⁾

これが、20世紀に入ると実存哲学の中で「生ける身体」が重要なテーマとなる一方、ユクスキュル（Uexkull, J.）など一部の生物学などと結びついた哲学的人間学が、身体をもった現実存在としての人間のあり方を主題とするようになるなど、「身体」の復権に向けた動きをみせはじめる。

20世紀から現代にかけての身体論の流れの中で重要な位置を占めるのが、メルロポンティ（Merleau-Ponty, M.）を中心とする現象学的アプローチである。メルロポンティは、精神と物質、あるいは心と身体は二つの異質な実体ではなく、二つの異なったゲシュタルトに他ならないとし、ある水準のゲシュタルトから、より統合度の高いゲシュタルトが浮き彫りになるとき、前者は後者にとっての「身体」であり、後者は前者にとっての「心」と考えた。従って、彼によれば、心（精神）と身体は概念は相対化されるべきものであり、「身体」とは既得の弁証法的地盤である。（村上, 1992）ここでは、彼の思想の具体的な内容にまでは立ち入らないが、メルロポンティの一貫した関心は、「見えるものを見るものたらしめている見えないものの存在水準に定位すること、また、語りうるものと語り得ないものとの互いに蚕食しあう関係、とりわけ世界の〈厚み〉を形づくっている『黙して語らない経験』の層を析出すること」（鷲田, 2003, p.77）であった。これが具体的な身体論の形をとったのが『知覚の現象学』だが、鷲田（2003）によれば、メルロポンティは、知覚をはじめとする主体の経験を論じる中で、それが対象の側に超越したところに見出される客観世界に属するものとしてみる経験主義や自然主義の立場でも、主体を内側に超越したところに見出される理性や知性一般の側からそうした経験を説明する主観主義的な立場のどちらでもない、それらの両義性をもった間の領域に「身体」の意味を位置づけている。即ち、身体は「世界の内部にある一つの物的対象ではないし、かといって意識と同じでもない」（p.83）、ある中間的な存在領野を指し示している。

こうした、精神と肉体を統合し世界にむけて自己を開いていくはたらきとしての身体観は、現代の思想家に受け継がれ、デカルト的心身二元論を脱却した関係論的身体論のパラダイムをかたちづくっている。日本では市川浩がそれまでの現象学、心理学、生理学などの知見に基づいて、独自の視座から二元論の再考と新たな身体論の提示を試みている。以下にその概略を示す。

5. 市川浩の身体論

5-1 主体としての身体

上述のように、メルロポンティ以降、「身体」とは解剖学的に理解される物質的器官の集合体ではなく、世界に開かれた心身のはたらきの諸相であるとの理解は、身体論における基本的前提となった。市川（1992）は科学が扱う解剖学的な身体と、具体的にはたらいっている実在としての身体を区別し、後者を「主体」としての「生きられた身体」とする。これは幻影肢に見られるような、物理的に存在しないが実際の感覚を呼び起こすものから、道具によって媒

介された「拡大された身体」(p.44)まで、様々な形をとりうる。こうした「生きられた身体」は、常に我々と共にありながら、普通それ自体としては意識されない。この「主体としての身体」は「ある種の広がりを感じや量感」(p.73)を伴いながらも、限定された形を持たず、諸部分間で距離、方向、広がりについての感覚を変えつつ生成する「身体空間」を生み出す。これは、ある種の内部感覚に基づいた自己の身体の認識の基底にあるもので、局所的な痛みやかゆみの場所を視覚などの他の知覚を通さず瞬時に定位したり、一連の動作において身体の諸部分の動きを連動させるうえで先反省的にはたらく主体である。この「身体空間」を市川は「質的な場」(p.74)としても表現するが、それは、はたらきとしての身体がある種の自律性を持ちながら人を具体的行動に向け、意識下でその方向性を与える主体となっている状態を指すものと考えられる。

市川によれば、こうした「主体としての身体」は、ものやいわゆるパーソナルスペース(Hall, 1966)などの社会的意味を伴った空間の知覚、間主観性による他人という存在の把握、さらに他者との関わりにおけるの自己性の把握の底に意識下のはたらきとして常に存在し、主体および客体としての世界や他者の知覚において、その両面に交錯し循環する。市川は、こうした循環的な身体のはたらきは、ものや他者との相互作用に基づく関係的な構造の中で生起するとし、「構造としての身体」というコンセプトに基づく身体論を展開する。

5-2 構造としての身体

市川(1992)のいう「構造」とは、あるものの知覚や特定の行動に向けて身体的要因を内的に統合するための、「われわれが暗黙のうちに前提にしている網のようなもの」(p.50)で、我々はその網にかかった現実を捉えている。この構造は身体的要因の統合のレベルにより、大きく二つに分けられる。即ち、下意識的⁽⁶⁾レベルでの統合による「向性的構造」と、意識的レベルの統合による「志向的構造」である。いずれの統合構造も、それぞれ外界を指向し外部に対してはたらきかける「外部作用的」側面と、自己の内的状態を指向し内部ではたらく「自己作用的」側面を持つ。外部作用的行動は、外部環境を変化させるべく外界にはたらきかけるが、同時に、はたらきかけを支えるための内部構造の変化を伴う。一方、自己作用的行動は内的条件を指向しながら、外部環境の変化に対し自己のあり方を調整する形で機能している。生理的なレベルの例を挙げれば、前者はある行動のための脈拍の増加や血圧の上昇であり、後者はホメオスタシスにみられる環境変化に応じた生理的平衡の保持である。こうして生体は自己にとっての環境の様々な意味を指向しつつ活動するが、そうした「意味」は環境との関わりの中に生まれ、「生体が環境に与えるものであると同時に、環境によって生体に与えられる」(p.127)ものである。

市川は、知覚という志向的構造の外部作用的側面を、最も明瞭に意識化されたものとする一方、意識の焦点が当てられている知覚対象の「図」の背景には前意識的な「地」が広がっているとし、「地」があってこそ意識野における両者の分節が成立すると述べる。それは、「図の意

味を限定し、具体化する地平」(p.171)である。この分節化のはたらき自体は、反射的な反応がそうであるように通常意識化されないが、それは我々が自己を把握していることと矛盾しない。つまり、我々が対象に没入し「われをわすれている」ときでも、我々は前意識的かつ非措定的に自己を把握している。市川は、ここに志向的レベルとは別に、図化を可能にしているより根源的な分節の主体を想定し、この前意識的・非措定的な自己把握が志向的構造にとっては不可欠であるとする。それは、反省によっては完全に対象化され得ない、前意識的な「私」という自己把握のはたらきである。この「私」は、指向の背後にある「実体」ではなく、志向的構造(意識活動)それ自身の自己把握⁽⁷⁾であり、従って、それ自体は完全に意識化され、対象化されることはない。これは、志向的構造が、習慣化された前意識的な自動作用や、抑圧され無意識に沈む「志向の歴史」(p.146)まで統合する向性的構造に基づいて成立していることを意味しているが、この向性的構造の内受容的感觉としての現れには、自己把握を支えるいわゆる「原始感覚」や「体感」が含まれている。こうして、反省以前に於いてすでに「私」は、「意識下の構造の中に半身を浸し」(p.146)、向性的構造のレベルでの意味発生によりすでにその志向を規制されている。

以上が、市川の身体論の骨子である「はたらきとしての身体」の諸相をなす「構造」とそれらの相関についての議論の要約である。以下に、清水の〈場〉理論における「身体」への意味づけと、市川およびその他の論者による議論との関連を論じることで、〈場〉における「身体」の実像を探る。

6. 環境と自己の関係の自律的生成と身体性

市川の身体論と清水の〈場〉における身体のはたらきとの対比において最も示唆的な連関が、市川のいう志向的構造の基底的功能としての向性的構造の役割と、清水の自己の二重性の議論における遍在的自己のはたらきとのアナロジーである。その主部は、我々の身体にはたらく無意識的なレベルでの「構造」、ないしは内的秩序の自己組織として提示され得る。

市川の向性的構造は、通常意識の及ばない領域で自律的に内部および外部作用的な身体のはたらきを統合し、これを志向的構造レベルのはたらきである行動や知覚への準備的契機として基礎づける。この構図は、清水のいう生命システムの持つ内的秩序の生成能力が、対象化されない、つまり下意識的な遍在的自己のはたらきに内在する自律的な情報生成能力に依拠していることと興味深い類似を示している。このことは、市川が「はたらきとしての身体」の現実的側面を表すのに用いる〈身〉の概念の意味を考察することで、より明らかになる。

上述のとおり、市川(1992)は、「精神」とは身体に根ざす生きた我々の存在の構造的統合レベルが、意識的、志向的方向に極度に高まった状態を指すものにすぎないとし、「身体」と「精神」の区別は、はたらきとしての身体があるレベルの統合を達成した状態を人間的現実の具体的局面として抽象化することによるものであり、本来両者の間には区別はないとする。市川(1993)によれば、この具体的現実としての統合をよりの確に表す概念が〈身〉である。〈身〉

とは単一的に身体、精神のいずれかを指すのではなく、「精神でもある身体」、「身体でもある精神」としての実存である。(p.196) はたらきとしての身体である〈身〉には、上述の向性的構造と志向的構造の両面が関わることになるが、いずれの構造を指向する場合でも、〈身〉は関係的存在であり、それが関係するものとの関係に応じてあり方を変える。具体的には、〈身〉は、「わが身」、「身につく」、「身にしみる」のように、文脈に応じ「身体」、「心」、「自己」、「立場」などを示す多義性、重層性を持つ。こうして、〈身〉は自らを環境との関わりに応じて分節化していく一方、自己の分節化によりそのパースペクティブを変えながら、環境を意味的に分節化していく。この両義性を持った分節のあり方を市川は「身分け」と呼ぶが、彼はその特質を様々なレベルでの「自己組織性」として描写する。即ち、〈身〉は「それ自身は自然の一部でありながら、動的均衡を保ちつつ自己組織化する固有のシステム」(市川, 2001, p.9)として生起し、生理的レベル、運動レベル、意識-行動レベル、文化レベルなどで自己組織化し身分けしていくのである。市川(2001)によれば、こうした身分けの結果分節された環境の状況や自己の状態の変化は経験的に自覚できるが、どのレベルにおいても〈身〉それ自身が分節されるプロセスは前意識的なものである。(pp.9-14)このことは、〈身〉が向性的構造と志向的構造の両面のはたらきを内包し、特にその自己作用面においては意識下のはたらきである向性的構造の作用が強くはたらいていることを示唆している。

この、身分けの向性的側面は、清水の〈場〉の自律的生成と原理上同軸をなしている。先に引用したとおり、清水(2000)によれば、個人のうちに生成する〈場所〉のイメージとしての〈場〉は、自己の意志に関係なく、その身体の自律的なはたらきによって、自己の「場所的領域」に〈場所〉が「映される」ことにより生成されるものである。この場所的領域とは〈場〉の情報を感じ取る遍在的自己の内的はたらきをさすが、この、環境の提示する文脈に応じて環境の諸要因の総体としての〈場所〉の心像的枠組みを自律的に作り出し、自己の内的感覚として映し出す主体とは、意識的であると共に前意識的な統合機能を持ち、自らを自己組織する〈身〉と解釈しうるのではないか。〈身〉は現実世界に錯綜する様々な環境要因を受け止め、その向性的はたらきにより、ある統合された意味内容として創出する。これはある刺激から特定の反応への線的なプロセスではなく、市川(1993)が指摘するとおり、環境に開かれた生体というシステムが様々な情報を統合し、可能的行動までも素描する情報生成のシステム、および、道具や記号を仲立ちとしたメタシステムを生み出す作用(pp.211-214)である。清水(1978)によれば、生命体の根源的な性質は、生命要素が〈場所〉における自らの位置情報を生み出し、他との整合性を持つよう振る舞う能力である。この情報共有を可能にするのが遍在的自己のはたらきであり、この位置情報に基づいて、個々の要素は己の振る舞いを決定していく。ここにおいても、様々な環境要因が背景としてはたらいており、しかもそれらが絶えず変化する中で、個々の要素は直観的に〈場所〉の状態を感じ取り、〈場所〉にあったアクションのための指針とするのである。こうしたきわめて多様な変数要因が絡むシステムは、要素還元的な論理では説明がつかない点で、いわゆる複雑系に属する。(清水, 2000) 同様に、重層的に様々なレベル

で世界と入り交う〈身〉は、ハイアラーキー型、非ハイアラーキー型の両側面を持つ「多次元網状自己組織系」(市川, 2001, p.40)である。

このように、清水のいう遍在的自己による〈場所〉のイメージ生成も、市川の〈身〉の自己分節のプロセスも、特定の上位の器官やシステムによる線的情報伝達に(少なくとも単一的には)依存せず、環境との関わりの中から自己のあり方を規定するための情報を自ら作り出している点で、「自己組織的」であるといえるのである。

こうした、身体による環境と自己の間の分節的関係の自己組織作用の存在を裏付ける現象として、佐々木(1987)は「むかう」アクションと「なぞり」アクションの統合による、運動感覚を拠り所とした認識への傾向を我々が持つことを指摘する。「むかう」アクションとは、我々の身体が持つ認識の志向性を指すために佐々木が使う概念である。例えば、身体の特定の部位では、そこに書かれた文字が反転して認識されたり、さらには我々の近接空間についても同じく反転がおきやすい方向とそうでない方向がある。これは我々の身体、およびその周辺空間には認識上の志向性が存在し、そうした志向性が知的プロセスを経ずにはたらいっていることを示している。⁽⁸⁾

一方、「なぞり」アクションとは、眼球の動きのように、その軌跡が対象の形に同調し、その姿を再現するような身体の動きであるが、このタイプの動きは、ものを視覚的に捉える際に必要だけでなく、書字において字をなぞる過去の手の動作が文字の精確な認識に深く影響したり(pp.30-31)、自分の位置とある地点との位置関係を把握するのに、実際の歩行の感覚を元にした場合と、地図に基づく視覚的経験のみにもとづく場合とでは、前者の方が圧倒的に正答率が高くなる(pp.72-76)⁽⁹⁾など、普段は意識に上らないものの、空間の認識に欠かせない身体的要因となっている。

佐々木によれば、実際には互いに連動して初めてものの正確な認識を生み出すこれら二つのアクションは、我々の認識の「運動感覚的モダリティ」(p.96)を形成している。即ち、ものの知覚は身体の様々な動きに関連づけられてなされており、我々にとって世界の認識は運動を通じ、知覚の諸チャンネルを統合する形で生み出されるのである。動く身体はそれ自体が「独立して意味を生成する認識の舞台」(p.5)であり、「自立して認識を生み出す饒舌な主演」(p.5)である。

佐々木はさらに、身体が持つこうした自立した意味生成のはたらきが、環境との相互作用のなかから生み出されていると示唆する。彼は、いわゆる「イメージ」の生成は、認識一般同様、身体の動きに基づくものであるとし、イメージ生成論における伝統的「視覚パラダイム」の再考を提唱する。⁽¹⁰⁾ その上で、彼は、イメージをつくり出す身体の根源的「動き」として、ワロン(Wallon, H.)の「姿勢反応」を取りあげている。それによると、我々が世界と結びつく媒体となる身体の「動き」の主要なものには、通常我々が行動や行為と呼ぶ「能動的で自己因的な運動」、受け身的で外因的な「姿勢運動」の二種類の動きとは別に、身体各部およびそれらの細部の間の相互の関係として現れる「姿勢反応」があり、これは内的要因により「筋の緊張の

波」(p.121)といった微細な動きとして引き起こされる。一般に「姿勢」と呼ばれる自己塑形的なこの動きが、知覚的な調節や予期としての「イメージ」を作り出す認識の基礎となっている。ワロンは、こうした「姿勢」の心的実現としてはたらくのが「情動」であるとし、この姿勢-情動系は状況の多様性に応じて分化・分節し、その多様性を反映したものになると結論する。(浜田, 2004, p.224) つまり、佐々木(1987)が述べるように、「外部世界のリアリティはまず自分の身体に姿勢として現れる」(p.122)のである。

身体が、変化する外的状況の多様性を内的なアウトプットとして「姿勢」に反映し、前意識的に統合された内部感覚を姿勢を通じて情動的な価値を帯びたイメージとして意識化するという、この、外界の認識においてはたらく自律のプロセスについての知見は、身体が向性的なはたらきを通して自らの中に環境(場所)の状態を映し出し、それに整合するよう内的秩序を自己組織的に生み出しながら自らを分節していくという、〈場〉生成における遍在的自己の〈場所〉と個人との身体性を媒介にした自律的な関係生成とその更新のメカニズムを、生態学的認識論の立場から説明するものとして注目に値する。

7. 環境の状況把握と身体性

前節では、清水の遍在的自己による内部場所としての〈場〉の自律的な生成機能を、市川という向性的構造レベルでの〈身〉の自己組織作用に対応するものと考え、両者とも、環境との相互作用を通じて自己の内部に外部の状況を映し出す形で自律的な自己分節を行う、「主体」としての身体のはたらきを表すものとして論じた。我々がこうした環境との関わりの中から紡ぎ出される自己のあり方についての情報を意識のレベルにもたらすとき、それは具体的にどのようなプロセスによるのだろうか。

清水(1999)によれば、生命要素が作り出す〈場〉の情報は、個々の要素のはたらきが〈場所〉の性質と整合的な状態になるべく自己のはたらきを内的、外的要因に応じて変えていくために生成され、個と個、および個と全体の中に循環する、一種の「操作情報」である。(p.264)

この操作情報が一つの拘束条件としてはたらき、〈場〉の中にいる個々の要素の振る舞いを〈場所〉の状態に合うよう限定していく。我々にとってこの操作情報自体は意識化できないが、その作用により〈場所〉の状態が身体に映し出され、身体の状態として意識化されたとき、それは感覚的、情動的な価値を帯びた「意味情報」となる。清水のいう「意味」とは、個と場所全体との価値的連関とそれにコンシステントな自己の振る舞いについての指向を表すが、それは同時に内観的な身体性として反映されるものでもある。こうした身体性は、自己のいる〈場所〉については、例えば「広大な大地」、「悠久の時を流れる大河」といったような内的空間性、時間性の表象として意味づけをおこなう(清水, 1996, p.70)一方、その〈場所〉の「雰囲気」や「印象」として、自己にとっての〈場所〉の意味を直接身体に反映する。(p.67)

清水のいう、遍在的自己の持つ、〈場所〉と自己を関係づける操作情報とは、市川の身体論に照らしてみた場合には、向性的構造の自己作用のおよび外部作用的側面に深く関わると考えら

れる。上述したとおり、向性レベルにおいても、主体としての身体は、環境との関わりの中から自己にとっての環境の様々な意味を見出している。また、意識下的な向性レベルと意識的な志向レベルは互いに相関し規定し合うため、世界の認識において両者を別なプロセスとして切り離すことはできない。市川は、この両構造の中間的位置に生成する現象として、「気分」を取りあげる。

市川（1992）によれば、「気分」は知覚のように明瞭に外部志向的ではなく、情動のような強い自己作用も持たない。⁽¹¹⁾ それはむしろ両構造の未分化な領域に属し、向性的および志向的レベルにおいて、「両義的・前客観的な我々と世界とのかわり」（p.139）が気分において開示されている。この、環境と自己を結ぶ前意識的な向性的統合の意識への現れとしての「気分」ときわめて類似したはたらきの記述を、ワロンの「情動（émotion）」についての議論に見ることができる。

ワロン（1956）によれば、情動は臓器的感受性に根ざした自己受容性感覚と密接に関わっており、上述したとおり、様々な「姿勢（attitudes）」反応を伴って、しばしば明確な対象を持たないまま体感的に意識に上る。浜田（2004）はワロンの情動反応のメカニズムを次のように要約する。即ち、情動反応が起こるきっかけは外界の刺激による外受容感覚だが、情動反応の場合は刺激に対して直接に適応行動として反応する外界作用活動とは異なり、身構え、震え、緊張、痙攣といった自己塑型的な姿勢反応を伴う。この、器官・臓器にはたらく緊張性の姿勢活動の心的な現れが「情動」である。（p.218） 浜田によれば、外界の刺激を的確に定位してそれに反応していくのが外界作用的な適応活動（図1のaのサイクル）であるのに対して、情動行

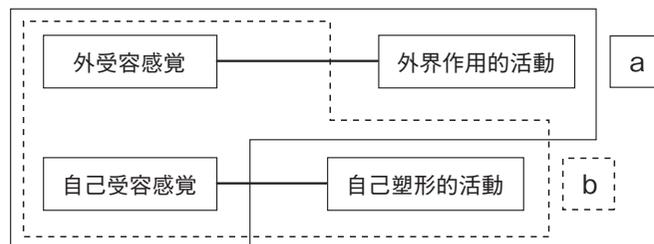


図1 ワロンの感覚・受容—活動・運動図式
（浜田.2004, p.218の図をもとに作成）

動では主体が外界の刺激や状況を感じて、自己受容感覚として内部状況に写し、自己塑形的活動となって拡張・増幅していく（図1のbのサイクル）のである。（p.220）⁽¹²⁾

さらにワロン（1956）は、情動が外界と自己の認識に直接関わっていると主張する。ワロンによれば、我々はある一定の「姿勢」をとることで「外の現実をはっきり意識」と同時に、「自分自身をも意識することができる」（p.171）。先述の通り、こうした姿勢が生み出すイメージには多分に情意的要素が含まれるが、こうした情意性によってこそ、「イメージが心的生活の中に根をおろし、単純な自動作用の回路にイメージの回路が付加される」（p.171）のである。

浜田（2004）によれば、これが意味するものとは、単に一般的な知覚に情緒的要因が加えられるということではなく、情動が「意識、そして表象の根」（p.224）になっているという事実である。即ち、外界の状況は、一般的にいう知覚により直接認識されるものではなく、分節した姿勢-情動系を通じて意識されるのだとする。（p.225）その意味で、「状況はそれ自体において認識されるのではなく、状況が生み出した興奮によって認識される」（p.225）のである。ワロンによれば、こうした情動に基づく認識過程では、反射や習慣などの自動的行動が何らかの理由で機能しない状況で、それに対応すべく姿勢-情動系が惹起する身体的興奮によって外的状況が知らされるのであり、「意識」とはこうした姿勢-情動系の作用により自動的行動と現実とのずれの中に生じるものである。（p.225）⁽¹³⁾ 従って、ワロンの論理に従えば、我々の外界の認識とは、いったん感覚器官で受容された刺激が向性レベルで統合され、自己受容性感覚となったものに姿勢-情動系のはたらきにより情緒の意味づけがなされ、広い意味でのイメージとして表象化されることで自己にとっての外界の意味を自覚することを指すことになる。ここにおいてもやはり、自己の身体に〈場所〉の状態を映し出すことにより、自己の位置、即ち自己と〈場所〉との関係を知るといふ、清水のいう場所的自己（遍在的自己）による場所的自己言及の論理が垣間見える。このように、〈場所〉と自己の関係の把握とは、決して特別な条件の下で起きるものではなく、外界の認識一般における身体性のはたらきとして、すでにそのプロセスに組み込まれたメカニズムによってなされているのである。

情動と気分は、強度や対象の明確さなどの点で表象としての性質上異なるが、両者とも意識下の身体のはたらきに源をおき、自律的なプロセスを経て一つの姿勢、ないしイメージとして意識にのぼり、さらに情緒的な色づけを伴って知覚のあり方にまで影響している点で、市川の向性的構造のもつ、外界と自己を結びつつ両者の間の関係を統合された心的表象として表現するはたらきとして理解することが可能である。後述するように、情動のはたらきは、他者との間主体的状況にあっては共振的な集合性を帯びるが、その際個人にはたらく情報共有のメカニズムの基底には、やはり、外界の状況を自己の身体に映し出すという、遍在的自己の向性的統合のはたらきに相当する作用がはたらいていると考えられる。これについては次節で詳しく述べる。

8. 共有される身体と自己の二重性

8-1 自他非分離的關係性生成のメカニズム

前節までは、個人のうちに清水のいう遍在的自己のはたらきによる〈場所〉のイメージとしての〈場〉の生成がいかにかき起るかを、市川の〈身〉の自己組織における向性レベルの統合作用と関連づけて論じた。ところで、関係性の枠組みとしての〈場〉がとりもつつながりは、個人と〈場所〉の間のつながりであると同時に、〈場〉を共有する個人間のつながりでもある。即ち、先述の通り、遍在的自己である場所的自己は、〈場所〉と非分離的な関係にあるのみならず、主客の境界を越えた自他非分離的な存在であり、他者の遍在的自己と繋がって自他非分離

的自己を形成するのである。河合（1976）によれば、こうした、〈場〉を共有する個人間には無意識的に一体感が生まれ、それは個人としての行動原理を凌ぐ拘束力を持つ。（pp.14-17）

清水（1999）によれば、遍在的自己のはたらきによるこうした自他非分離的な個々の生命要素間の関係の生成は、〈場所〉と個の間関係と同様、自律的な秩序形成として「自己組織的」に行われる。細胞レベルの組織化による生体器官の分化や再生に典型的に見られるこの要素間の共働は、個々の人間集団にも〈場〉を介して〈場所〉の文脈の「共創」として生じると清水は述べるが、それぞれのレベルにおいて具体的にどのようなチャンネルを通じ、どのようなメカニズムで個々の要素間に情報が共有されるかについては、細胞などのマイクロレベルでは、ある形態や動きなどといった表象作用に関わる抑制物質の要素間の濃度勾配や、要素間の何らかのリズム的共振によるのではないかとする仮説的な提示にとどめている。（清水、1978）実際、共創的運動体としての細胞集団の共創原理は、未だ科学的に解明されていない。（清水、2000、p.91）一方、清水は、われわれが行う共創においては、空間を共有する個人間にはエントレインメント（entrainment）と呼ばれる同調作用がはたらき、互いの身体的リズムが同期していると述べる。このエントレインメントの存在を明らかにした有名な研究が、コンドン（Condon、1976）による、対話する個人間にみられる無意識的な身体動作のシンクロニーについてのものである。佐々木（1987）によれば、彼は新生児と母親、および成人同士の会話の様子を録画したフィルムを数十分の一秒の単位で観察し、発話者の身体の微細な動きが、単音、音節、語など複数の層においてその音声のリズムと見事に同期していることを見出し、さらに、同様の微細な動きがやはり音素レベルで聞き手の身体の動きと同期していることを発見する。コンドンが「コミュニケーションダンス」と呼ぶこの現象は、対話する個人同士の身体が、先反省的に動きを共起させる「認識の共振体」（p.155）であることを示している。身体が取り持つ同調作用としてのエントレインメントは「引き込み」現象ともよばれ、他にも対話する個人間での心拍変数の同期（渡辺・大久保、1998）などが報告されている。

清水（1999）は、「引き込み」とは生命要素間の「生成リズムが同調してコヒーレントな状態が生成される状態」（p.322）であり、リズムが同調することで相互に関係と身体的状態の共有が起きるとする。清水（2000）によれば、大脳辺縁系の神経回路網にも見られるこうした共振的同調作用は、我々のコミュニケーションにおいても他者との間に身体性に基づく自他非分離の状態を生み出し、共通の〈場〉をつくり出している。（p.162）

市川（1992）は、〈身〉のもつ根本的性質として、このエントレインメントと性質上高い類似性を示す我々の對他者関係生成能力を提示している。上述したとおり、市川は〈身〉を関係的存在と定義づけたうえで、他者との関係においても常に〈身〉の関係的分節は前意識的レベルではたらくとする。市川によれば、この〈身〉の关系的なはたらきは、他者の身体を対象として見る際にも知らぬ間に主観性を付与しているが、この主観性は、我々の對他身体的な応答に現れる。例えば、他者の微笑み、赤面、顔のこわばりなどの表情は、我々の對他身体的な応答として同様の表情を喚起する。これらの表情反応は、他者の表情の内面的素描であると共に、

自己の主観性の表現であり、相手にもその表情をとらえることによって、対他身体的な反応を呼び起こす「主観身体」を形づくらせることとなる。(p.105) こうして、互いの表情は対他身体を介して生成する「相互主観的な場」(p.106)をつくり出す。こうした間主観的なやりとりは、明瞭な意識を伴ったコミュニケーションを可能にする基盤であり、前意識的なレベルでの社交空間を構成している。こうして他者とのかかわりにおいて具体的に身体性がはたらく状況にあっては、個人は他者の対象身体と主観身体とを明確には区別できない。(p.108)

市川によれば、こうした意識下の身体レベルでの自他の相互作用のはたらきは、他者認識の範囲にとどまらず、他者の行動への「同調作用」となって現れる。市川(1992)は、同調作用を、複数の生成的構造の間にはたらく構造の交渉原理であると性格付けたうえで、この同調作用には「同型的な同調」と「相補的(ないしは応答的)同調」があるとする。前者は、我々が他者の動きを無意識になぞる現象を指す一般にいう同調作用であり、他者の悲しげな表情を見た子供が同様の表情を示したり、ボクシングの観戦者がボクサーの動きに同調し、同じ動きをしないまでも筋肉を緊張させ、その動きを密かになぞったりという、感応的な反応に代表される。これは単なる模倣ではなく、感応により対象の動きを先取りするような予期的同調である。一方、後者の相補的同調とは、前者の同型的同調が完全に内面化された段階で起きる、相手の動作に応えるという形で現れる同調である。上の例との関連でいえば、ひいきのボクサーの動きを同型的な同調を通して内面化した観戦者が、相手のボクサーの動きをなぞり、それに反応する形で相補的に同調するのである。いずれの同調も「他者の〈身〉の統合との関係において起こる一種の感応ないし共振」(市川, 1993, p.94)であり、構造的なアナロジーによる同調である。⁽¹⁴⁾ 顕在的な相補的同調は潜在的なレベルでの同型的同調を前提とするが、両者が円環的になされることで、より深いレベルの同調が可能となる。例えば、対話や合奏では互いの言葉、演奏、行為に対する同型のおよび相補的同調が顕在、潜在の両レベルで円環的に繰り返されることで「共同主観的な場」(p.182)が生成する。

このように、〈身〉のもつ間主観的他者認識と同調作用には、向性レベルで他者の身体に浸透し、自他の間に共通の間主観的な文脈性をつくり出す潜在力が内在している。この共鳴のプロセスこそ、関係子としての個人が互いに身体性を通じて自己組織的に関係性を生み出すことを可能にする、遍在的自己の自他非分離的な関係生成のはたらきを表すものと見なしてよいであろう。

8-2 他者との関係性生成の媒体としての身体

市川の示す間主観的な他者認識と同調作用において、自己と他者との感応的はたらきを取り持つ媒体としての身体の実体とはどのようなものだろうか。同調し合う者同士が行っている身体レベルのコミュニケーションにおいて互いに非言語的にやりとりされる情報は、いわゆる五感を含む身体感覚を通じて受容され、向性的レベルで統合され構造化されると考えられるが、こうした前意識的な相互主観的他者認識や同調作用の基底には、「原初的共存」ともいえる

自他未分離の身体性がはたらいっていることを市川は示唆する。

市川（1992）は、ある非言語的表現が他者に理解されるのは、類推や学習を通じた記号解釈による知的プロセスのみによるのではなく、むしろそれらを可能にしている、より原初的な他者理解の形があるためだとする。これはいわゆる「感染現象」に象徴的に現れ、赤ん坊が他の赤ん坊につられて泣き出すといった乳幼児特有の感応的反応や、成人にもあくびや乗り物酔いが連鎖的に起きるなどといった形で見られる。こうした現象は「自他未分化な、ほとんど生理的次元の相互反応」（p.274）であり、われわれの他者理解の最も低次の層に「共生」ともいべき原始的な過程としてはたらいっている。（p.274）

河野（2005）はこれらと類似した、身体レベルでの共鳴的動作をわれわれが生来持っている「模擬能力」によるものとして取り挙げている。彼は、ゴードン（Gordon, M.）の模擬行為についての記述を引き、乳幼児が、親が視線や注意を向けるのに供応して同じ対象に視線や注意を向ける「共同注意」や、鏡などで一度も自分の顔を見たことがないにもかかわらず親と同様の表情や動作をする「共鳴動作」を挙げて、これらの原初的模倣行動に関わる他者の認知が、類推や演繹といった媒介を経ずに、他者の動きによる自己の運動過程への直接的な触発の結果として起きていると指摘する。（p.100）さらに河野は、同様の共鳴的現象は成人の間主体的行為にも現れることを示唆する。例えば、他人が躓いて転ぶのを目撃することが、自分も転んだときと同じ身構えや姿勢、発声を引き起こす。このとき、他人の行動と自分の身体感覚は「二つに分かたれた一つの身体」（p.100）であるかのように符合している。こうした、身体レベルの共鳴的反応についての記述は、ワロン（1956）の「姿勢」についての説明にも見られる。

先述したとおり、ワロンは、具体的な運動の展開への構えや内的自己受容性感覚の統合として与えられる「姿勢」は、その心的要因の現れとしての「情動」を生み出すとして情動の身体的側面を強調するが、ワロンによれば、この情動は他者に対して強い伝染性をもつ。即ち、ある個人に生じた姿勢-情動系の反応は、同一状況に対する同時的な共同反応として、一緒にいる者すべてにそれに対応する「情意-運動複合体」（p.176）を惹起するのである。

佐々木（1987）はこの姿勢に裏付けられた情動の伝染性に言及し、次のように述べる。

あらゆる感情、例えば心地よさ、脅え、恐れなどの内的な状態が、なによりもまず我々のからだに弛緩、身構え、震えなどとして現れることが示すように、「姿勢」は認識の生成にかかわると同時に、他者への強い伝播力を持つ情動の舞台でもある。群れをなして生息する動物（広義には我々もその一部だろう）の間で、例えば危険の知らせのような信号が、まさにからだを伝う波としてひろがっていくことを見ればわかるように、情動の「場」としての「姿勢」はもっとも原初的なコミュニケーションの場を形成している。（p.122）

こうして、姿勢-情動系のはたらきは、上述した通り知覚そのものの基盤となり、内部感覚に情意的要素を加えることによってイメージをつくり出すと共に、「個人を超えた意識の共通性

の基盤となる」(佐々木, 1987, p.122)。

山口(2002)は、こうした意識下での身体性を通じた他者との共生的つながりを「匿名的身体性」によるものと説明する。山口によれば、自我の発達以前にある乳幼児では、主客の区別の明確でない身体性である「匿名的身体性」がはたらいており、周囲世界との直接的なコミュニケーションが自我の意識作用の介在なしに行われている。これは成人にも持ち越され、世界の認識においては、まず匿名的身体性がはたらき、そこに高次の意識の層が加わることにより「直接的経験」がそのたびごとに作られている。(p.239) この匿名的身体は他者との関係においても「匿名の間身体性」としてはたらいており、自他の区別のない身体性として、もらい泣きや武道の師の動作が稽古を通じ自分に乗り移ってくる感覚などの形で経験される。(pp.232-233) 演出家の竹内敏晴は、この自他非分離的な間身体性による運動図式の転移と共有ともいふべき現象の体験をこう描写している。

何ヶ月かたって、レッスンをしているとき、私はふと気がついた。自分のからだの動きが向かい合っている相手に移って、新しい動きができるようになる、あるいは相手の動きが自分の方に移ってきて、相手のからだの歪みなりとどこおりなりが感じ取れてくる。そして、自他が激しい気合いの交錯の中で微妙に反応しあうとき、めざましい変貌が起こる。このときは、自とか他はもうなくなっている。他の動きは自と一つに融けあい、自の呼吸が他を生氣づけている。(竹内, 1988, p.122)

山口(2002)によれば、分離した存在としての自己の自己性、および他者の他者性の認識は、まずこの匿名的身体性があり、それがもたらす感覚によっては充実されない現実とのずれを体感的に認識していくことで、その都度成立するのである。⁽¹⁵⁾ この意味でわれわれは、「二重の構造を持つ身体と自我を同時に生きている」(p.232)。

〈場〉の生成プロセスにおいて、個々の成員間にコヒーレントな関係を作り上げる媒体としての自他非分離的自己である遍在的自己は、こうした自他の間に浸潤する匿名的身体性をその一様態として、互いの状態を共有し合いながら、共通の文脈を作り上げる素地を構成しているのではないか。もちろん、この自他非分離的な身体性には様々な側面と次元があり、一元的に単一の実在として扱うべきものではないであろうが、一方、こうした先自我的な、身体性による他者との協応的コミュニケーションが成立するという事実は、ワロン(1956)、松尾(1987)、竹内(1988)、湯浅(1990)、木村(2005)など多くの身体論の論者により共通に指摘されている。

いずれにせよ、「共有」された匿名的身体としての遍在的自己とは、個人と個人の間には存在するエーテルのような媒質的実在ではないであろう。むしろそれは、それぞれの〈身〉が相互のリズム的引き込み(エンタテインメント)により共振している状態ないしはそのはたらきをさすものとみるのが妥当と思われる。市川(2001)は、〈身〉の自己組織が、絶え間のない〈外〉

との相互作用のなかではじめて可能になるという意味において、〈身〉は「開かれた」システムである (p.9) としたうえで、〈身〉の存在形態上の二重性を次のように説明する。

〈身の〉関係論的構造においては、環境の分節化は身の分節化であり、両者は循環している。逆にいえばそれらは〈関係場〉における両側的な出来事なのである。可能的系と可能的なかかわりをふくむ高次錯綜体を理念的に想定するとすれば、現実的自己組織系としての〈身〉が生成すると同時に、それと現にかかわっている現実的系と、関係可能な構造としての可能的系が分節化され、〈世界〉が生成する。(p.54)

市川は、こうして分節化した世界における空間は、自己中心化されると同時に脱-中心化され、間主体化される両義的な空間である (p.26) とし、次のように述べる。

自己中心化は脱-中心化によつてのりこえられるのではなく、両者は関係化の両極として同時にはたらいっている。すなわち、生きられた空間の生成においては、空間の均質化へ向かうはたらきと、空間の質的特性の自立化へ向かうはたらきの両極がみられるのである。(p.26)

こうして、重層的に分節化された間主体的な空間において、世界の分節化の反照として、〈身〉みづからが現実的系としても可能的系としても分節化され、「集合的でもあれば個人的でもある両義的な身の構造がかたちづくられる」(p.54) ことになる。

この集合的側面と個人的側面を共起的に持つという身体の特性は、共空間内の個人集団による共働的行為に顕著に見られる。木村〈2005〉は、音楽の合奏の例を引き、演奏家集団に共有される音楽のノエシ的性質⁽¹⁶⁾が、同時に個人のものであることを説明する。即ち、技術的、芸術的に優れた演奏家による合奏では、一人ひとりの演奏家が各自のパートの演奏を純粋に自発的で主体的なノエシ・ノエマ的創造行為として行いながら、成立した合奏は驚くべきまとまりを持つ。このとき、各演奏者は、自分の奏でる演奏を意識しているだけでなく、合奏全体をあたかもそれが自分自身のノエシ的自発性によって生み出された音楽であるかのように、一種の自己帰属感を持って各自の場所で体験している。一方、音楽全体の鳴っている場所がごく自然に自分以外の演奏者の場所に移り、演奏者の存在意識がその場所に完全に吸収されることもあり得る。こうして、音楽の成立している場所は、だれのものでもない、一種の「虚の空間」となる。(p.38) この空間を木村は「あいだ」と呼ぶが、木村によれば、外部である「あいだ」の場所に鳴っている音楽それ自体の自律性と、各自の内発的な演奏行為のもつ自律性は、同じ一つの事態として生起するのである。(p.41)

こうした個と全体とを結ぶ身体のはたらきは、市川いう、世界を分節すると共に世界に分節される〈身〉の両義的性質を指すとみて良い。つまり、市川によれば、外界に拡大し、他者を含む環境と取り結ぶかたちで分節化されるいわば遍在的形態の〈身〉と、自己中心化され環境

を分節化する局在的形態の〈身〉とは、関係体としての〈身〉の差異化された二様態である。従って、個人に属する〈身〉は実は共有された集会的な〈身〉を内包しており、その内部に共同的な〈身〉を映し出しているということになる。清水が、自己の内部に映し出された〈場所〉の状態を「内部場所」として〈場〉と同一視したのと同様、こうした共有された自他非分離的な身体性とは、他者の身体と共振する自己の身体に他ならない。こうした身体は、物質的存在形態を離れ、ちょうど量子場において物質的実在が〈場〉の量子の確率の変換性そのものとなる（中村，1989）ように、状況に応じて姿を変えながら外界と内界を統合する、自己可塑的な存在となっているのである。その意味で、身体感覚とは、「自分の感覚であるであると同時に世界感覚でもあるような、両義性を持った基層の感覚」（市川，1993，p.190）である。

ところで、この、原初的でありながら、高度に意識化されたコミュニケーションにおいてもその基底に常に作用している根源的な共生関係を支える身体とはいかなる構造をもつのか。それは、メルロポンティの「身体図式」と深いかわりを持つような、湯浅〈1990〉のいう、自己と外界との間に相互浸透し合った状態で存在し、「感覚的に認知できない存在次元」にはたらく、「心でも身体でもない『作用の組織体』」（p.310）にあたるものであろう。それは木村（2005）のいう「メタノエシスの原理」としての「あいだ」であり、「関係化を可能にし、関係を関係として捉えることを可能にする関係化の原点」（市川，2001，p.52）としての〈身〉である。〈場〉におけるこうした身体性を通じた他者知覚と間主観的コミュニケーションを支える「根源的身体性」の有り様については、稿を改めて考察したい。

9. まとめ

本稿では、共有された空間における〈場〉の生成過程で、身体が個人においていかに情報伝達と意味生成の媒体および主体として作用し、他者を含む環境との関係構築においていかに機能すると考えられるかを、関連する領域からの知見を引きながら議論してきた。議論の基本的文脈を設定するために、清水博の生命科学に基づく〈場〉の理論と市川浩の現象学的身体論を相対させ、前者における身体性についての記述を、後者における身体概念と照らし合わせることにより、後者の理論的枠組みに従って〈場〉における身体性のはたらきとみられるものの述定を試みた。また、他の領域からの関連概念を引用しながら、〈場〉においてはたらく身体性の性格と本質について考察した。

考察から示唆されたように、市川のいう「主体としての身体」の向性的統合である〈身〉⁽¹⁷⁾は、清水のいう〈場〉を成り立たせている我々の遍在的自己と構造上および機能上高い類似性を持ち、個人を超えた拡がりをもたず、他者を含む世界と我々を結んでいた。具体的には、〈身〉は自己の存する外界の状況を自己の内部感覚としてその身体の深部に映し出し、「姿勢」という身体的図式を介して気分、情動といった情意に色づけられた心的統合としての状況のイメージを形づくることによって、その〈場所〉と自己との直接的な関係を我々に把握させ、自己の表現活動における作業的指標、即ち拘束条件として、我々の意識と行為に志向性を与えて

いる。一方、〈身〉は、遍在的自己と同じく先意識的に他者との直接的なつながりを担保する媒体となるとともに、そうした共同性に基づく自己の把握をも成立せしめていた。

この、主客を超えた身体のはたらきが、〈場〉を通じていかに個人に自己の位置情報を与えているかについては未だ科学による解明に至っていない（清水，1999）が、我々が〈場〉の情報を内部感覚として感受し、統合されたイメージや情意的反応として意識に映し出すうえでの〈場〉の情報の伝達経路がどのようなものであるかは、ある程度特定できると思われる。即ち、外界からの情報は我々の「感覚器官」を通して入力され、何らかのシステムによって向性レベルで統合される一方、統合された感覚的情報は、身体的な図式となって具体的な動作や姿勢への予備的志向性を生み出す。ただし、この入出力のプロセスが単純に個々の感覚器官からの刺激にのみ依存する知覚のシステムによるものとするのは危険である。そこには、木村（2005）の指摘するように、五感を貫き、その基底に働く「第六感」ともいいうる直観的な世界認識の位相が絡んでいる可能性がある。また、アウトプットとしての身体レベルの志向性の創出には、上に述べた、遍在的自己、即ち自他非分離的な〈身〉の構成を支える、いわゆる「根源的身体」が関与し、単純な線型モデルでは扱えない縁起的な情報生成の仕組みが内在しているかもしれない。

湯浅（1990）はヨーガや漢方医学で扱われる「気道」としての「ナディ」、「経絡」に着目し、これらが生理的身体と次元を異にする「準＝身体」の組織を構成している可能性を示唆したうえで、身体図式、およびそれに賦活されて働く生理的身体の根源となるもう一つの身体存在の層を想定する。〈場〉の情報伝達が、通常感覚的にとらえうる生理のプロセスに加え、こうしたほぼ不可測量的⁽¹⁸⁾ではあるが有效果的に自明な身体的チャンネルにも依存している可能性を否定する根拠はないであろう。

本稿は、〈場〉における身体性のはたらきを論じるうえで、既存の関連理論と関連領域の知見を参照するという方法をとった点で、その理論的考察にとどまった。今後、実際の〈場〉と〈場〉を介した共創における、上述した身体性の作用の存否とメカニズムについての実証的研究が望まれる。

【注釈】

- (1) 場において個人間で交換される情報として、野中・紺野（2000）に見られるような言語メッセージを含める論説もあるが、本稿では身体レベルで授受、共有される非言語的な情報に絞って論じる。
- (2) ここでは知覚を「内在的知覚」（山口，2002）としての感覚作用を含む広義の意味で用いている。
- (3) 清水（2000）はこの他者と共有される自他非分離的自己と個々の自己中心的自己の関係を「卵モデル」を用いて説明している。即ち、2個の卵を一つの容器に入れたとき、個々の黄身に相当するのが自己中心的自己であり、互いに分離した自我的独立性を持つのに対し、解け合った白身は自己の共有部分を生みだし、〈場所〉の状態である容器の形状などを直接的に反映しながら、それをそれぞれの黄身（自己中心的自己）に伝えている。

- (4) 清水(2000)はこのイメージを「場所モデル」と呼ぶ。
- (5) 市川(1992)によれば、デカルトは精神と身体の合一として感情や感覚のはたらきを挙げ、両者の緊密な結合を説いているが、これらは独立した精神が前提となる、精神と身体との峻別に立ったものであった。
- (6) 市川(1992)は、非意識的、前意識的、無意識的〈深層心理学的な意味での〉の3つの身体の統合、および意識とのかかわりのレベルを「下意識的」と総称する。
- (7) 市川(1992)はこの自己把握を、デカルト的コギトを支える「われ」の存在への暗黙の了解としながらも、コギトがその存在の明証性を与えるのみにとどまり、志向性の構造的な解明に至っていない点でその明証性の価値を疑問視する。
- (8) 具体的には佐々木(1987)によれば、我々の前方の近接空間においては、通常反転がおきにくいとされる手の甲などに書かれた文字も認識上反転を起こす。このことは、空間自体に反転を起こさせる、つまり内側から外側への「まなざし」的志向性がはたらいっていることの裏付けであるとされる。(pp.51-58)
- (9) 佐々木(1987)はこの二つの空間のとらえ方の違いをそれぞれルロワ＝グーラン(Leroi-Gourhan, A)(1964)の「巡回空間」と「放射空間」に相当するものとし、前者が空間認識における「なぞり」アクションに関わる側面であるとしてその重要性を指摘する。(p.77)
- (10) 佐々木(1987)は忘れた文字が「空書」により再生されること、失読症患者の一部が文字をなぞれる条件下では字を読めるようになる「運動覚性促進」などの例を挙げ、意識体験としては視覚的に現れるイメージの生成と再生が運動感覚的モダリティに依存していることを指摘している。(pp.94-98)
- (11) 市川は「情動」を志向的構造の自己作用として位置づけ、これと「気分」を区別して記述するが、湯浅(1990)によれば、類似した情緒概念である「情動」、「感情」、「気分」、「衝動」、「情念」は、一般には特定の情緒反応の持続時間、強度、本能的欲求との関連、対象の明確さなどにより区別される。ワロンの「情動」は内部感覚に発生の根源をもち、適応行動などの意識活動に影響する「生体的意味」をもつ情緒的反応の総称である。
- (12) この自己受容感覚と自己塑型的活動の循環の中で増幅される情動行動のわかりやすい例が、くすぐられて笑いに至るまでのプロセスである。
- (13) すべての認識のメカニズムが姿勢—情動系のはたらきに還元されるとの見解については反論が予想されるが、情動による知覚への意味づけについては、市川(1992)、湯浅(1990)、清水(1996, 2000)にも同様の記述が見られる。
- (14) 市川(1992)は「同調」を、構造レベルでの一致であり、相手への完全な同化ではなく、従って、その動きも相手と全く同じ動きである必要はないと指摘する。この例として市川は、子供が、自分の目の開閉に対して両手や口の開閉で応えるというピアジェの示すケースを挙げている(p.182)
- (15) この原始的な内的運動感覚は「キネステーズ」と呼ばれ、乳幼児は他者〈主に母親〉の声やはたらきかけが自分の身体を動かすときのキネステーズの感覚と一致しないことからその非自己性を体感的に認識していくという。(山口, 2002)
- (16) 木村は演奏の行為的側面を演奏の「ノエシス」面、意識にのぼった表象としての音楽を「ノエマ」面と呼ぶ。そのため、これらは通常フッサールの現象学などでいう意識の作用的側面と内容的側面を指す「ノエシス」、「ノエマ」とは異なった意味を持つ。
- (17) 本文中でも触れたとおり、市川は、厳密には〈身〉を向性レベルと志向レベルの両領域にまたがって存在するものとし、高度の意識活動に基づく統合も〈身〉のはたらきに含めている。ここでは、文脈上向性レベルでの〈身〉の統合のみを扱う。
- (18) 湯浅(1990)によれば、経絡の存在を示唆する科学研究としては、経穴(つぼ)にあたる皮膚の部位が他の部位に比べて電気抵抗が低いことを明らかにした中谷義雄の生理学的研究や、視神経萎縮症の患者の経穴への針による刺激が、経絡の図式と同じ方向に走ることを見出した長浜善夫らの内部感覚についての研究がある。

【参考文献】

- Condon, W.S. (1976). An analysis of behavioral organization. *Sign Language Studies*, 13, 285-318.
- Hall, E., T. (1966). *The hidden dimension*. NY: Anchor Books.
- 浜田寿美男 (2004) 「解説」『ワロン／身体・自我・社会』(pp.208-267) ミネルヴァ書房
- 市川 浩 (1992) 『精神としての身体』〈講談社学術文庫〉講談社
- 市川 浩 (1993) 『〈身〉の構造 身体論を超えて』〈講談社学術文庫〉講談社
- 市川 浩 (2001) 『身体論集成』中村雄二郎編 〈岩波現代文庫〉岩波書店
- 河合隼雄 (1976) 『母性社会日本の病理』中央公論社
- Kono, H. (2007). *Ba in the American context: An exploration of Japanese in U.S. workplaces*. Unpublished master's thesis, University of the Pacific, Stockton, CA.
- 河野秀樹 (2010) 「〈場〉とはなにか-主要な理論と関連する概念についての学際的考察」『目白大学人文学研究 第6号』(pp.39-60)
- 河野哲也 (2005) 『環境に拡がる心 生態学的哲学の展望』勁草書房
- Leroi-Gourhan, A. (1964). *Le geste et la parole*. 荒木亨訳『身振りと言葉』新潮社
- 松尾 正 (1987) 『沈黙と自閉 分裂病患者の現象学的治療論』海鳴社
- Merleau-Ponty, M. (1945). *La Phenomenologie de la Perception, Gallimard*. =1967. 竹内芳郎・小林貞孝訳『知覚の現象学1』, 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳『知覚の現象学2』みすず書房。
- 三宅美博 (2000) 「コミュニケーションと共生成」清水博編『場と共創』(pp.339-398) NTT出版
- 村上隆夫 (1992) 『メルロ＝ポンティ人と思想112』清水書院
- 中村雄二郎 (1989) 『場所 (トポス)』弘文堂
- 野中郁次郎・紺野 登 (2000) 「場の動態と知識創造 ダイナミックな組織知に向けて」伊丹敬之, 西口敏宏, 野中郁次郎編『場のダイナミズムと企業』(pp. 45-64) 東洋経済新報社
- Polanyi, M. (1966). *The tacit dimension*. 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房
- 佐々木正人 (1987) 『からだ：認識の原点』東京大学出版会
- 清水 博 (1978) 『生命を捉えなおす』〈中公新書〉中央公論社
- 清水 博 (1996) 『生命知としての場の論理 柳生新陰流に見る共創の理』〈中公新書〉中央公論社
- 清水 博 (1999) 『新版 生命と場所 創造する生命の原理』NTT出版
- 清水 博 (2000) 「共創と場所：創造的共同体論」清水博編『場と共創』(pp.23-178) NTT出版
- 竹内敏晴 (1988) 『ことばが劈かれるとき』〈ちくま文庫〉筑摩書房
- 露木恵美子 (2003) 『場と知識創造』北陸先端技術大学院大学博士論文
- 木村 敏 (2005) 『あいだ』〈ちくま学芸文庫〉筑摩書房
- Wallon, H. (1956). Rapports affectifs: les emotions, H. Wallon (Ed.). *La vie mentale. Vol.VIII Lencyclopedie Francaise*. 浜田寿美男訳『ワロン／身体・自我・社会』ミネルヴァ書房
- 鷲田清一 (2003) 『メルロ＝ポンティ 可逆性』講談社
- 渡辺富夫・大久保雅史 (1998) 「コミュニケーションにおける引き込み現象の生理的側面からの分析評価」『情報処理学会論文誌, 39, No.5』(pp.1997-1230)
- 山口一郎 (2002) 『現象学とははじめ 日常に目覚めること』日本評論社
- 山口一郎 (2004) 『文化を生きる身体 間文化現象学試論』知泉書館
- 湯浅泰雄 (1990) 『身体論』〈講談社学術文庫〉講談社